

レイヤー・ケーキ

2006(平成18)年8月13日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★★



監督・製作＝マシュー・ヴォーン／出演＝ダニエル・クレイグ／ジョージ・ハリス／トム・ハーディ／テイマー・ハッサン／ケネス・クラナム／コルム・ミーニイ／マイケル・ガンボン／ジェイミー・フォアマン／バーン・ゴーマン／サリー・ホーキンス／マーセル・ユールス／ベン・ウィショー／シエナ・ミラー／ナタリー・ルンギ (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント 配給／2004年イギリス映画／105分)

第3章

実際にやったらアカンで！

……麻薬の密売という裏社会できちんと生きていくため最も必要なものは、表社会と同じ(?)「信頼」。主人公が自らに課す11のルールは、「目立たぬように はしゃがぬように 似合わぬことは無理をせず」という河島英五の『時代おくれ』の歌詞を彷彿させるものだが、その最後は「好調なうちに引退しろ」というもの。他方、「下っ端チンピラから上層部ボスまで、裏社会の階層(レイヤー)をケーキに例えた言葉」がレイヤー・ケーキ(Layer Cake)。凝りに凝ったストーリー展開の中、主人公はうまく自分の描く人生設計どおりの道を歩けるのだろうか……？

レイヤー・ケーキとは？

レイヤー(Layer)とは階層。したがって、この映画のタイトルである Layer Cake(レイヤー・ケーキ)とは、下っ端チンピラから上層部のボスまで、裏社会の階層(レイヤー)をケーキに例えた言葉。そのココロは、一番上はおいしそうだが、裏社会の仕事はそんなに甘くない……。主人公XXXX(ダニエル・クレイグ)は名もなき麻薬ディーラーだが、「おいしい仕事はそれほど甘くない」ことをよく知っているから、彼が自らに課す11のルールのラストは、「好調なうちに引退しろ」というものであり、一番上を目指すようなヤボ(?)なことはしない。ヤクザ社会で一番上を目指すようすれば『ゴッドファーザー』(72年)のようなすごい映画になるが、麻薬取引という裏社会の中で知恵を働かせて利口に

儲けたうえ、旬のうちに引退しようというセコい(?)人物を主人公とし、裏社会におけるレイヤー・ケーキの皮肉を描いた面白い映画がコレ……。

主役に名前のないのはこの映画がはじめて……

この映画の主人公が裏社会で生きていくために自らに課しているルールは、次のとおり合計11カ条ある。そして、これは誰が見てもきわめて合理的なもの。すなわち、それは①常に少人数で動け、②決して目立つな、③欲張り過ぎるな、④敵を知り、尊重しろ。法律をバカにする奴は、本当のバカだけだ、⑤取引は紹介された人物だけとしろ、⑥末端のユーザーは避ける。必ず問題が起こる、⑦何より避けるべきは、目立ちたがりのえせギャングだ、⑧正当に稼げ、⑨供給者に金をちゃんと払え、⑩計画を立て、それに従え、⑪好調なうちに引退しろ。

映画の冒頭、このルールが主人公の口から語られていくが、これを聞いていて思い浮かべたのが、河島英五の『時代おくれ』の歌詞。すなわち、「目立たぬように はしゃがぬように 似合わぬことは無理をせず……」。

問題はそれを実行するだけの知性と決断力があるかどうかだが、主人公XXXXは見事にそれを実践したかのように見えた……。この映画最大のポイントはラストの数シーンにあるので、ゆめゆめそれを見逃すことのないように……。しかし、主人公に名前のない映画、したがって上映中誰からも名前を呼ばれない主人公というのは、ホントにこの映画がはじめて……。

ストーリーは凝りに凝ったもの……

この映画は1時間45分だが、そのストーリーは凝りに凝ったもので、鑑賞後パンフレットを読みながらきっちりと復習しなければなかなかわからないはず。現に私のすぐ斜め後ろの席に座っていたおっさんは、エンドロールが流れ始めるや、席を立ち「何やサッパリわからん！」とほざいて出ていったほど……。

この観点から見ると、この映画のパンフレットはよくできている。主な登場人物は、名前なしの主人公XXXXを含めて合計14名(うち女性3名)と多いが、その人間関係が図示されたうえ、01~14までの登場人物がストーリー上果たす役割がうまく要約されている。したがって、きちんとこの映画のストーリーを理解するため

には、パンフレットを参照することが不可欠。もっとも、ここでその複雑で凝りに凝ったストーリーを逐一紹介しても、それは全く意味がないことは明らか。そこでここでは登場人物についての若干のグループ分けとストーリーのポイントだけを……。

XXXX の仲間とそのボスは……？

表稼業の不動産賃貸業できちんと税金も支払っている主人公 XXXX が、前述の11のルールの下に組んでいる仲間が、モーティ（ジョージ・ハリス）、クラーキー（トム・ハーディ）、テリー（テイマー・ハッサン）の3人。モーティは刑務所に10年間服役していた過去を持つ黒人で、無口だがイザとなると恐そう……？ 他方、ボスであるジミー・プライス（ケネス・クラナム）の片腕のジーン（コルム・ミーニイ）は、XXXX に仕事を指図する立場。

今回の仕事は何かヘン……？

XXXX はこういう仲間たちと、ジミーの指図にしたがって仕事をしていたが、今回のジミーの指図の第1は、時代遅れのギャングのような男デューク（ジェイミー・フォアマン）が手に入れた100万錠もの高純度のエクスタシーを売りさばくこと。これは今までと同じような仕事だが、100万錠とはものすごい量。それでも、これを従前どおりうまく売りさばけば、あとは引退となるはずだった……。

しかし、今回はもう1つヘンな指図が。それは、裏社会の大御所エディ・テンプル（マイケル・ガンボン）の娘で、今は麻薬患者となっているチャーリー（ナタリー・ルンギ）を至急探し出せというもの。「そんな仕事はオレではなく、私立探偵に」と言ってみたものの、ジミーの指図を断ることは到底ムリ。別に難しい仕事ではないと考えた XXXX は、気楽に(?)これを引き受けてしまったが……。

デュークはヘンな奴……？

裏の世界でも（だからこそ?）、凶暴な奴やええ格好しい、そしてバカはいるもの。この映画におけるそれがデュークとその仲間、何と国際指名手配のセルビア人であるスラヴォ（マーセル・ユース）から100万錠のエクスタシーを強奪したのがこのデューク。すると、今回 XXXX が売りさばこうとしているブツ

はこの強奪品……？ そうだとすれば、XXXXの命もヤバイのでは……？ だって、怒り心頭に発したスラヴォは、デュークの殺害を命令しただけではなく、XXXXもその仲間だと見なして、殺し屋を送り込むことになったのだから。この映画表面上のストーリーはこんなモノ……。

アッと驚く裏ストーリーがタップリと……

表のストーリーだけなら十分理解できるし、XXXXが意外に真面目(?)にジミーから与えられた2つの仕事を処理しようとしている姿が印象的……。しかし、それだけではこの映画の特徴は全然見えてこない。この映画が凝りに凝ったストーリーとなっているポイントは、第1に100万錠のエクスタシーを売りさばけと指図したジミーは、それがスラヴォからの強奪品であることを知っていたのかどうかということ。その点をめぐっては、かなりややこしい話が展開されるから、顔と名前とその役割を確認のうえで、しっかりとスクリーン上に集中を……。

第2のポイントは、なぜジミーがエディの娘チャーリーを探し出そうとしたのかということ。45年来の親友エディの娘だから親切心でという触れ込みだが、果たしてこんな海千山千のボス連中にそんな親切心が残っているのだろうか……？ そして、冒頭から登場しているジミーと対照的に映画中段から登場してくるエディはどんな人物で、ジミーとどちらが大物……？ そして、大物同士の対立はないの……？

そんなところにポイントを置いてこの映画を観れば、「サッパリ訳がわからん！」と捨てセリフを残して出ていったおっさんほど、欲求不満にはならないはず……？

お色気もホンの少しだけは……

この映画は、裏社会にうごめく男たちの欲望と争いそして裏切りの連続を描いたものだから、女は所詮添えモノ扱い。エディの娘チャーリーは探す対象としての存在だけだし、デュークの恋人であるサシャ(サリー・ホーキンス)はデュークに輪をかけたバカ(?)とみえて、登場するシーンではヒステリックにわめいているだけ。しかし、いい女が全然いないのかというとそうでもなく、デュークの甥っ子のシドニー(ベン・ウィショー)とXXXXが偶然出会ったところで、XXXXはシドニーから「おじさんからあんたの名前はよく聞いている」と話し

かけられることに。クールな仕事師である XXXX はこれを無視していたが、その連れにタミー(シエナ・ミラー)という美しい娘がいるのを見ると、急に態度が豹変。

XXXX は最近はやりの「チョイ悪おやじ」どころではなく、中年ながら渋くてカッコいい男だから、タミーも露骨に XXXX に対して興味を示してきたから面白い。自分の命が殺し屋から狙われていることがわかっている、お色気だけは別と見えて、XXXX は積極的にアプローチを仕掛けてくるこのタミーと2人きりでホテルの一室で過ごすという幸運(?)を手に入れることに。濃厚なキスを交わした後、ベッドでタミーの身支度(?)を待つ XXXX だったが……? こんなお色気シーンもホンの少しだけは……。

教訓がいっぱい……

麻薬と覚醒剤そしてエクスタシーは、何がどう違うのか……? 何が合法で何が非合法なのか……? これらの密売組織はどんなシステムで動いているのか……? その儲けはどれくらいで、その反面危険はどれくらいあるのか……? いろいろとわからないことが多いので、勉強すべきこと(?)もたくさんあるが、この映画はそんな基礎的知識の勉強よりも、裏社会で生きていくための教訓がいっぱい……。それは、もともと頭のシャープな主人公 XXXX が、冒頭の11カ条のルールを自らに課していることからよくわかる。しかしこの映画では、ジミーから受けた2つの指図を処理していくうちに、XXXX はいつしかこのルールどおりの行動から逸脱していくことに……。もちろん、それは XXXX が悪いのではなく、否応なく動いていく事件に巻き込まれてしまうからだが、そんな中で XXXX が示す行動が興味の的。もともと、裏社会における「レイヤー・ケーキ」を一步退いた目線から客観的に眺めていた XXXX が、否応なくその中に入り込んでいった時、彼は一体どんな選択をするのだろうか……? そして、彼は彼の目論見どおりの人生を送ることができるのだろうか……? もし、あなたが裏社会で生きていくことを目指しているのなら、この映画から学ぶ教訓がいっぱい。もっとも、私は裏社会だけでなく、表社会でも似たようなことがいっぱいあると思っているのだが……。

2006(平成18)年8月14日記